

地球侵略物語

【登場人物】

エー：宇宙人

ビー：宇宙人

キミ江：町の住人

## 【概要】

地球侵略を企む宇宙人が日本へ上陸する。地震を起こして町を全滅させようと考えた宇宙人は、準備が整うまで地球に住むことに。翌日、自治会で事前復興長に任命される宇宙人。流されるまま活動し市長に表彰されるまてになる。不審に思った仲間が偵察にやってくる。散歩の道中、高台移住に反対するおばあちゃんに出会う。話すうち、その姿を祖母と重ねてしまい思わず移住を勧めてしまう宇宙人。ついには侵略を諦め星へ還っていく。

宇宙船の飛行音。

ピョロピポと宇宙言語での会話。

N 「彼らは地球侵略を企む宇宙人2人組。今聞こえているのは彼らの星の言葉です。え、何？ 聞き取れない？ ご安心ください。

今回は親愛なる日本のみなさまのため、特別に日本語吹き替え版でお送りいたします」

ビイ「どこに着陸するかな」

エー「あそこなんてどうだ。バカみたいに広い」

ビイ「馬鹿はお前だ。敵の多いところにいきなり乗り込んでどうする」

エー「じゃああつちは？ 大陸のおまけみたいな島国じゃないか」

ビイ「はぐれた迷子みたいな国だな。気に入った。あそこにしよう」

N 「そうしてこの日から、ある町の住人に宇宙人が一人加わりました。もう一人は星へ還って、侵略の準備です。二人は每晚連絡をとり、その日の出来事を報告しあうこと

にしました」

通信機器の呼び出し音。

通信を開始する音。

ビイ「どうだ、地球生活は」

エー「最悪だ。体は重いわ、暑いわ、じめじめしてるわ」

ビイ「元気そうだな。で、科学技術はどうだ。発展してるのか」

エー「技術は俺らが勝ってる。けど、とにかく人間の数が多。数で負ける」

ビイ「数か。ふん。それなら、人間の数を一気に減らす方法を」

ガシャーンと棚の倒れる音。

エー「うわっ！」

ビイ「どうした！」

エー「揺れてる！ 家が揺れてる！」

ビイ「……その手があったか！」

エー「何だ！ 少しは心配しろ！ わっ」

ビイ「地震を起こすんだよ」

エー「ん、ああ、そうか、これが地震か……」

ビー「理論上は可能なはずだ。大陸のプレートを引っ張って……」

エー「揺れたぐらいじゃ殺せないだろ」

ビー「いいや。揺れが大きければ建物は壊れる。津波も起こる。地震で死ななくとも、被害が大きければ立て直すので手一杯になる。いずれ疲れ果て生きる気力がなくなる」

エー「……お前は残忍だな」

ビー「ふん、ほめ言葉か」

N「数で負けると判断した彼らは、地震を起こして一網打尽作戦に出るようです。しかし、思い通りに運ばないのが計画というものの。翌日の彼らの様子を見てみましょう」

通信機器の呼び出し音。

通信がつながる音。

エー「大変なことになった」

ビー「何だ。何が起こった」

エー「今日、自治会に参加したんだ」

ビー「それがどうした」

エー「そこで、昨日起こった地震の話になっ

た」

ビィ「ふむ」

エー「そして事件は起こった。なんと、メンバーの一人が事前復興をしましょうと言いつ出したんだ」

ビィ「事前復興？ 何だそれは」

エー「最近はやりだした言葉らしい。災害が起こる前に、起こることを見越して準備を整えることを言うそうだ」

ビィ「捕らぬ狸の皮算用か？ くだらん」

エー「そんな準備をされたら、ダメージが最小限になってしまう。どうしよう」

ビィ「慌てることはない。そんなのただの絵空事だ。人間はたいてい締め切りまで動かない生き物だそうだ。いつ起こるか分からない災害に向けて対策なんて、進むはずがない。口だけさ」

エー「言われてみるとそうだな」

ビィ「だろう」

エー「ところで、ひとつ言い忘れたことがある

る」

ビイ「何だ」

エー「俺は自治会の事前復興長に任命されてしまった。長っているのはあれだ、トップって意味だ」

ビイ「は？」

エー「くじで決まったんだ」

ビイ「お前……くれぐれも余計なことをするなよ」

エー「わかってる」

N「事前復興という聞き慣れない言葉に翻弄される二人。翌日、また新たな動きがあったよう……」

通信機器の呼び出し音。

通信がつながる音。

エー「大変なことが起こった」

ビイ「今日は何だ」

エー「隣に女が引っ越してきた」

ビイ「何が問題なんだ」

エー「えらくかわいい」

ビー「ふざけるな」

エー「その女が感染症の話をしてきたんだ」

ビー「感染症？」

エー「はやってるらしい。人から人へうつるんだと。それで田舎に帰ってきたって」

ビー「そいつはいいことを聞いた」

エー「ん？」

ビー「人間が集まりや病気が一気に広まるってんだろ。もし地震が起こったらどうなる。

どこへ避難する」

エー「そりゃ、広くて安全なところに集まって

……あっ」

ビー「そこで一人でもウイルスに感染していればたちまち」

エー「お前は本当に残酷なことを考えつく」

ビー「この町をのつとる日は近いかもしれないな

いな」

エー「それはどうだろう」

ビー「まさか邪魔する気じゃないだろうな」

エー「女に感謝されたんだ。事前復興の指揮

をとって下さってありがとうございます。

心強いですって……」

ビー「お前……、余計なことをするなよ」

エー「わかってるわかってる」

N「感染症が流行しているとの情報を手に入れた二人。この混乱に乗じて被害を大きくする算段のようですが、さて次の日……」

通信機器の呼び出し音。

通信がつながる音。

ビー「今度は何だ」

エー「今日はなんと高校生が事前復興の取材に来た」

ビー「強制されて嫌々来たんだろ」

エー「いや。あいつらの目は恐ろしく輝いていた。あんな瞳に見つめられてみる。俺ははりきって質問に答えてしまった」

ビー「ふん。だから何だってんだ」

エー「つい勢いで事前復興に全力を尽くすと約束してしまった。どうしよう」

ビー「安心しろ。あいつらには何の権力もな

い」

エー「権力……」

ビー「権力のあるやつらは腰が重たいんだ。

今は熱意があっても大人になれば忘れるさ」

N「地球で暮らす宇宙人、どうやら町の人々に押され気味。そんな日々のなか、またあくる日」

通信機器の呼び出し音。

通信がつながる音。

エー「もうダメだ」

ビー「一応聞いてやる。何があった」

エー「市長に表彰されてしまった。どうしよ

う。嬉しい」

ビー「バカッ。何を喜んでる」

エー「事前復興に積極的に取り組む姿勢が評価されたらしい」

ビー「お前……一体何をした」

エー「高台への移住を提案したんだ。市長も賛成してくれた。こりや本格的にプロジェクトが始動するかもしれない」

ビイ「バカッ、もういい！ お前には任せておけない。明日俺がそっちへ行く！ いいな」

エー「……わかった」

N「そうして、惑星で準備を進めていたもう一人が町へ来ることになりました」

セミの鳴き声。

二人の足音。

ビイ「おい、いいか。俺も自治会に入れろ。

そしたら思い切り邪魔してやるから……」

エー「あ、キミ江さん。こんにちは」

キミ江「あんた、また説得に来たの。あたしは移住には反対だからね」

エー「違いますよ、ただ散歩に……」

ビイ「ばあちゃん、話が分かるじゃないか」

キミ江「あれ？ あんたいつ帰ってきたの！」

ビイ「何だ？ 勘違いするな。俺はここの生まれじゃない」

キミ江「あんた、まだそんなこと言っとったんね。そんな意地はらんでいいのよ」

ビイ「意地じゃなくて」

キミ江「あんたがどこに行っても何になっても、故郷はここなんじゃけ、遠慮せんと」

ビイ「だから……」

キミ江「あんたがいつ帰ってきてでもいいように、家は何も変わってないからね。最近に移住計画だなんだって言われてるけど、ウチは絶対動かないから」

ビイ「ふん、くだらん」

キミ江「くだらんって何ね」

ビイ「くだらないって言ったんだ。そんなの俺が望んでると思うか」

キミ江「あんた、そんな言い方はないやろう」

ビイ「ばあちゃんは思い違いをしてる。家なんかいらぬ。ばあちゃんがいればいい。ばあちゃんがいるところが帰る場所になるんだろうが」

キミ江「あんた……」

ビイ「ばあちゃんがどこでくたばろうが俺には関係ないけどな」

キミ江「……」

ビイ「行こう」

エー「あつ、キミ江さん、それじゃまた……」

二人のかけ足音。

ビイ「これがお前のやり方か」

エー「何の話だ」

ビイ「俺がおばあちゃん子だって何で知ってる？」

エー「知らないよそんなこと。……おい、どこに行くんだ」

ビイ「帰る」

エー「え？」

ビイ「こんな星、侵略する価値もない」

エー「え、じゃあ」

ビイ「やめだ。計画中止だ。さっさと帰って、この星がほろびるまでせいぜい観察してやる」

エー「お前は本当お人好しなやつだな」

ビイ「うるさい」

N「あれれ？ どうやら彼らは地球侵略を諦

めてしまったようです。え、何？ つまら  
ない？」

別の宇宙言語の会話が聞こえてくる。

N 「みなさま、ご安心ください。また新たな  
宇宙船が地球に接近している模様……」